

蒙古獨立運動の先駆者盛島角房小伝

松田清

角房の生いたちと少年時代

角房は、一八八六年（明治十九年）十月十五日、父角三、母おとがねの三男として徳之島亀津に生まれた。角房の父角三は、盛島家の分家で、亀津の「ウエギノ」という所に祖先を祭る社があり、毎年決められた日に一族や近隣の人達で祭りをしていた。

神殿の中には、盛島家以外の人は入れなかつた。本家には、代々伝承されて来た「銀のかんざし」がある。銀のかんざしは、藩政時代に上級島役人に認められた「シンボル」マークの一つでもあつたことを考えると祖先は上級島役人であつたと推定出来る。また、島役人は世襲であり、琉球王國時代に琉球王家の一族で徳之島支配に派遣されたのが始まりもある。「盛島」という姓は、明治になり平民も苗字を名乗るよう政府に命じられてつけたものである。

亀津は、藩政時代に代官所のあつた所で、徳之島の中心として栄えてきた。明治になり断髪令や廃刀令など旧来の慣習を一新する命令が相次いで出された。徳之島は、明治四年に廃藩置県になつても従来通りの代官政治が続いた。代官所は、名称が在番所となつた。明治八年にその在番所が支所と呼ばれるようになつたが本土に比べて大きな変革はなかつた。

鹿児島藩を武力で征圧していた西郷隆盛一派が県から一掃されて

始めて、奄美にも維新の新風が吹き始めた。この新風を率先して徳之島で断行したのが亀津の若手リーダーであつた。

従来の髪型を洋風に改めた。旧來の陋習を破り、進取の気風が島にも吹き始めた。これを「亀津断髪」と人々は称した。この断髪思想を身に滲み込ませ、ことばのハンドディをはね返し全国で各界に突出したのが、明治亀津人でもあつた。

その代表的なものをあげてみると、奄美人文学博士第一号上村清延（明治十二年生）、講道館の鬼徳三宝（明治十九年生）奄美人として日本弁護士会連合会会長第一号の奥山八郎（明治二〇年生）大島中学校長から厳訓無処罰教育の大家として人造りで有名となつた龍野定一（明治二十二年生）など全国各地で活躍し先駆者となつた亀津人の数は大変多い。

角房は、これらの級友・先輩・後輩に囲まれて育つた。幼名は「ジュマ」といった。父角三は、田畠も多く裕福な家庭であった。島では、地主や大きな屋敷のあるユカチュに対して、平民は「シユウ」という敬語を使用しており、角房の父も角三シユウと呼ばれていた。当時小学校は、四年制で、明治三十年に角房は、徳三宝や竹内良友ら四〇名と共に亀津小学校を卒業した。級友は、男が三六名いた

が、その中で相撲は角房が一番であった。当時は、島相撲と呼ばれる方法の相撲であり、土俵はなく、相手の背中を地面に着けたものが勝であり、蒙古相撲に似ていた。この相撲は、島内で昭和初期頃まで行われていたが、次第に「ヤマト式」の相撲に変わった。

明治三十五年、十六歳で海を渡り、宮崎県延岡中学に入学した。級友の徳三宝も鹿児島の二中に進学し「剣道は乱暴者だから禁止する」と校長から宣告され、柔道に転進し鹿児島市で暴れん坊の名を高めていた。

島での生活は、満十五歳までであり、物心ついてからは、わずか十二・三年に過ぎないがこの期間に植えつけられた人間の根性はそのまま人生を左右するものであった。世界どこに行つても忘ることの出来ないのが故郷であり、角房も後年、満蒙の大陸にあってもいつも思い出していたのが亀津の浜であり、夜空の星であり、川であり、島の山々であった。

明治四十一年（一九〇八年）角房は、延岡中学を卒業してから長兄角一を頼り上京した。徳三宝の後を追い、明治四十二年東京高等師範に入学、国語漢文を専攻した。当時すでに大陸へ夢が芽生えていたのだろうか。

一方、講道館に入門し、級友徳三宝と共に柔道を学んだ。中学時代の素地があつたためか技量も進み、明治四十四年に東京高師を中心として台湾に渡る頃は四段の免許を持つていたという。

明治四十三年、二十四歳の時に、延期になっていた徵兵検査を名瀬で受け、痔が悪いので丙種になつた。翌年、妹の主人伊地知一郎

台中測候所長（東京から明治四十二年赴任）を頼つて台湾に渡った。台湾に新天地を求めて、台中公学校柔道教師となつた。

亀津小学校の級友、竹内良友も、台北病院長高木友枝博士を頼り、台湾総督府財務局に勤務し、二人の交流は続いていた。その傾角房が台湾一周を計画しているという話しを良友は聞いた。友人たちは台湾一周は、蛮界もあり危険だからやめさせようということになり、台北駅頭で夕食を共にしながら止めるよう説得したが彼は聞き入れず、一周旅行を断行した。

自ら信ずる道を誰がなんと言おうが、突き進むのだという角房の人生哲学は、この一周旅行で培われたものであった。また、自分を抱いている大志は、東京でも台湾でも実現は不可能である。アジア大陸こそ、男子の一生を託する大地であるという信念に辿りつき大陸渡航を決心した。

大陸に渡ると直に、本籍を亀津から鹿児島市に移したのはどのようない理由によるものかわからないが、故郷徳之島への望郷の炎は、蒙古高原にあってもいつまでも消えることはなかつた。

昭和二年七月、母の遺骨を抱いて帰国した時、奄美で衆議院補欠選挙（七月二十二日施行）があり、後輩の奥山八郎弁護士と久留義郷先輩が同じ徳之島から立候補しており、その統一を試みたが失敗、島に帰つて奥山の選挙運動をしたが破れたこともあつた。

昭和十三年、蒙古の徳王に隨行して日本に帰国した角房は、久しぶりに奥山八郎宅に泊り、竹内良友らとも再会、島の話題に花を咲かせた。徳王に頼んで一筆の書を奥山八郎宛書いて貰つた。奥山邸

玄関には、額にされた徳王の文字が飾られ、角房の友情が偲ばれていた。

昭和十七年、角房は、養子とした房郎を徳之島に連れて行った。島の空氣の中で、自らの後継者を育てたいという角房の願いであつた。房郎が世話になる亀津小学校に、駱駝のぬいぐるみをこの時に寄贈した。

蒙古高原で、駱駝に乗り、ジンギスカンの廟に詣でたことを思い出すらくだでもあつた。この駱駝は、校長室に大切に保存されていた。角房は、当時、国宝的な人物となつており、その名も日本國中に知れ渡り、蒙古徳王の顧問として大陸でも活躍しているその姿は小学生の夢であり、鏡でもあつた。

裸一貫、故郷を後に、大志を抱きその夢の実現をめざして、アジア大陸にはばたいた男が角房である。その行動は、一巻の大河ドラマにも似ている。戦い敗れ、夢こわれ、空しく故国に帰った角房はどうとう、徳之島の土をふむことはなかつた。「幻の豪傑角房兄の足跡をぜひ記録に」と龍野定一は口ぐせのように語り続けていた。

明治三〇年三月、亀津小学校尋常科四年卒業生。田實 栄、知覧兼行、山 平野、亀沢道喜、基有信、小川文忠、津 富屋、鮫島吉雄、郡山治正、指宿秀安、徳 三宝、龍 光敏、福岡福孫、記喜美森、伊地知豊成、基 頂豊、深川富春、坂 喜登、大山豊吉、亀 蒔郎、新田元隆、益田清照、牧 重秋、龍 穎積、新田元孝、福島正明、新田為陽、福岡義忠、益田豊房、鶴木重春、中村孟子、龍 良明、盛島角房、竹内良友、實 角豊、春 義忠、安田めきよ、上 村めきよで、竹内つる、安田めと。（亀津小卒業生名簿、昭和52年

度刊）から。

角房に関する資料は、まだ収集途中であり、とりあえず集まつた資料から先人の足跡を辿つてみるとした。（松田）

徳王と角房と内蒙独立運動

ジンギスカン以来栄光の歴史を誇る蒙古人は、永い間漢民族の支配に屈していたが、一九二一年（大正十年）に独立の英雄スフバトル・チヨイバルサンの人民軍が、漢民族の地方軍閥を追い払い外蒙古に革命人民政府を樹立した。赤色ソビエトの支援によるものであつた。

日本帝国は、中国の東北地方で、一九三二年（昭和七年）に満州国をデッヂあげ、大陸への侵略を本格化した。蒙古人民共和国と満州国に国境を接する内蒙古でも王公たちが中国政府に対して高度な自治要求を出し、内蒙古独立をめざす動きが出て來た。

徳王（一九〇二年生、一九六六年没）は内蒙古の青年王公のリーダーであり、角房は一九二九年（昭和四年）に徳王に会つてからこの人こそ、内蒙古独立運動の中心となり、日本と手を結ぶ人であるとの確信を強くしていた。

内蒙古は、標高千メートルの高原で有名なゴビの砂漠以南の地にあり、面積は日本の三倍以上、人口も六〇〇万人いた。関東軍は、一九三五年（昭和十年）七月、徳王に対し、スーパー旅客機を進呈した。当時、中国で自家用機を持っているのは、蒋介石と張学良の二人だ

けであり、徳王は、これを「天馬号」と命名し大いに活用した。軍部は、一九三八年（昭和十三年）十月に、徳王ら蒙古の独立運動家を日本に招待、天皇を拝謁させ、勅章を授与したり、満州国皇帝にも会わすなど大変なもてなしを続けた。これらのことは全て角房の立案にもとづくものである。

徳王も角房を信じ、角房も徳王を信じており、角房は職業軍人的ないやらしさがなく蒙古人民にも高圧的なことはしないで、その独立を援護ようという信念に燃えていた。

一九三九年（昭和十四年）蒙古人部隊などの軍隊も出来「蒙古連合自治政府」がスタートし、徳王はその主席となつた。徳王は、日本人の顧問たちと将来あるべき内蒙古国の憲法についても討議を重ね、君主制の国家づくりの夢を描いていた。

一九四一年（昭和十六年）二月二十六日に徳王は、第二回目の日本訪問を行なつた。関東軍がなかなか独立を承認しないので、陸軍省に交渉、それでも不可能なら天皇に直訴したいと決意を秘めての来日であつた。

陸軍は「何れ独立を認めるがそれまで実力をつけ、自立体制をつくりあげるようにせよ」と要望した。徳王は「実力があるなら何も日本に頼る必要はない。自立出来ないから援助を求めているのだ」と執拗に喰い下つたが解決の目途はたたなかつた。

この時仙台の善應寺を訪ね「蒙古の碑」を見て「古道猶存」の碑を建てた。現在、その拓本が「らくだ会」の会員にまわされ、徳王の心を偲んでいる。

「徳王の師伝として二〇〇年」という中央紙の記事は、昭和十三年十月、徳王の隨行員として帰国した角房のことを書いたものである。十月三十一日、勅一等旭日章を授与された徳王ら蒙古要人ら十二人と共に撮った記念写真が残されている。小柄でひげを生やした五十二歳の角房の氣力に満ちた姿が目につく。

徒手空拳、二十数年で、日本を動かし、アジアを動かす人間となつたその熱血と行動力は、時代の流れに棹さしたとはいえ、他人にまねることの出来ない行動であつた。

ソ連軍は、民衆を中心に外蒙古人民軍を育て「蒙古人民共和国」の樹立に成功したが日本軍は、王侯貴族中心の工作に終り、社会革命を伴わないと内蒙古の独立に失敗したと後世の史家は述べる。しかし、角房が点じた内蒙古独立の火が再びくすぶり出す時代がないという保証は何人にも出来ない。

南海の一孤島に、生を受けた一人の男が故郷に思いをはせながら、極寒の大陸高原に残した火種は消ゆることがないだろう。「南陽山人」の号も、故郷徳之島に寄せる思いの発露でもあるう。

関東軍特務機関長として

角房は、一九一二年（明治四五年）北京入りして以来終戦まで一貫として、関東軍の特務機関員として三十四年間生死を省りみることなく奮闘して來た。

特務機関について、角房の門下生であり盛島機関の一員であった

内田勇四郎（昭和一〇年大阪外大卒）は「主たる任務は、諜報謀略活動であるが、内蒙古については、あまり隱密的なものではなかつた。比較的堂々と乗り込んでいき、現地の有力者に話をつけ看板をあげ活動をした。

一九三三年（昭和八年）に多倫機関（機関長安浦真徳少佐）を皮切りに西スニット（昭和十年三月）張北・张家口・德化・百靈廟・綏遠などに開設され、一番遠いのは、寧夏の阿拉善、オチナまでのばされた。

一九三五年春（昭和十年）私（内田勇四郎）がアカバの盛島機関に行った時、入口には墨痕鮮かに「閔東軍阿巴嘎陸軍特務機関」と大書された看板があつた。

特務機関の編成は、機関長（大低軍人）の下に補佐役（語学力のある大阪外語出身が多い）があり、事務室には会計庶務、通信室には二名以上の通信手、自動車運転手が二名位が最少要員であつた。新しい特務機関が進出した所には、高い竿二本にアンテナ線を張り、物すごい音を出す充電モーターを設置、無線で閔東軍参謀部に情報が絶えず送られた。隠密どころでなくすぐ所在がわかつた。暗号には、乱数表が使われた。中国側の軍用通信は殆んど解読されていた。

内蒙古側では、王公が接渉の相手であり、支那では地方軍閥であった。中国側にとつては許し難い存在であり、昭和十五年初頭には五原機関全滅という事件もあった」と記している。（昭和五〇年一〇月、盛島角房翁伝・非売品）

また、特務機関の活動について、盛島門下生の中嶋万歳は「徳王とともに」の中で「承德機内では「敗残兵や土匪をまとめて熱河省外に驅逐し、省内の治安を回復する工作を始めた。その方法は、兵一人当たり五円ずつ金を与えるというもので部隊をまとめて追い出すのに効力を發揮した。

当時、メリケン粉百斤が一円であり、一ヶ月三〇斤もあれば食いつなげる所以五円は大金であった。連絡にくる部隊が増加し、集まつた部隊を閻兵し、人員に応じて現金を渡し要領よく長城線の外へ引きあげてもらつた」と書いている。

中嶋万歳は、後に、内蒙古自治連合政府総務厅総務科長となつたが「昭和六年九月大阪外語を卒業し、万州北平に渡り毛皮商売の勉強中に始めて蒙古問題の権威盛嶋角房先生に友人の紹介で会つた。當時、盛島を盛嶋と書いていた。

昭和七年に、张家口の盛島先生から、大阪外語卒の青年が、閔東軍參謀本部の研究員となつて民族工作をやることになつた。君も一緒にやらんか、という勧誘を受けてそれに従うこととした。十二月六日、高等官待遇とし、月俸一五〇円支給の辞令を手に新京に到着し、角房の門下生となつた。と記している。

特務機関員は、新人でも「閔東軍參謀本部研究員で高等官待遇」は、不況のどん底にあつた国内のことを考えれば大変な就職でもあつたことだろう。熱河省の敗残兵追い出し作戦といい、閔東軍は金には全く不自由しなかつたようである。追い出した敗残兵がまた、舞戻つて来たら

どうするつもりでいたのだろうか。その作戦に幼稚さが感じられる。

特務機関長という職は、佐官級軍人が任命されていることを考へると、角房がいかに関東軍の中で重宝な存在であったかわかる。陸軍士官学校出身のエリート軍人に比べて民間人である角房の現地工作は、実にすばらしい人間性あふれたものであり、蒙古人のための蒙古独立運動こそが祖国日本に対する自己の義務と考えていたのであろう。

角房の記録には、中国人と殺し合いを演ずる血なまぐさい場面は殆んど出て来ない。しかし、その中で、昭和七年九月に討伐戦に参加しての帰路、トラック事故にあり、六ヶ月の重傷を負い、入院して手足が生涯不自由になったこと、シラムレンで、蒙古人部隊の反乱にあり、仲間や数多くの日本軍人が殺された事件は、特筆されてしまうべき記録といえよう。

盛島角房の名声を天下に轟かせた、最初の記録は、大正十五年（一九二六年）「大阪毎日新聞」夕刊の特報記事である。収集された記事からその大要を紹介しよう。

(1) 赤色蒙古入り第一号

一九二一年（大正一〇年）蒙古建国の英雄チヨイバルサンの卒いる人民革命軍は蒙古の独立を宣言した。現在の蒙古人民共和国のスタートである。

角房は、大正九年に外蒙の庫倫（クーロン）で特務機関の活動をしていた。当時三十人の日本人がクーロンで生活していた。クーロ

ンには日本人居留民会が一九一七年（大正六年）に結成され、蒙古人民軍と支那軍の戦いでは、革命防止のため支那軍を支援した。

大正九年十一月五日、三井物産の出張員を表看板に情報収集をしていた機関員の小西茂のクーロン発電報によると、日本人居留民会は支那軍司令部に銀一千元を義損金として献金した。内訳は、駐庫武官江副浜二が二〇〇元、日本医院吉田豊三が二〇〇元など八名の献金者の中に「盛島角房五〇元」がある。

「大正十年八月三日張家口発小西茂」の電報で、在張家口邦人内訳の中で、駐在武官陸軍歩兵少佐江副浜二、同助手盛島角房というのがある。当時、すでに角房は相当の地位にいたことがわかる。

蒙古の独立で、クーロンを追い出された角房らは、張家口に退却した。以来、日本人の蒙古入国は許されずなんらの情報も知る方法がなかった。

大正十年、当時毎日新聞布施辰治北京特派員の紹介で、外蒙入国許可を手に入れ、五月末にハルビンを出発、七月二日首都ウランバートル（元クーロン）に入った。赤化後蒙古入りした日本人第一号となつた。

大正十五年八月十六日「大阪毎日新聞」夕刊は、大スクープ記事として三千字余りの特電を掲載、角房の名が全日本中に知れ渡つた。当時、角房は、外務省の嘱託でもあった。

外蒙視察後、角房は大使館に二等書記官の重光葵を訪ねた。重光は、角房より一歳若い明治二〇年生まれで東大卒エリート外交館でもあった。外務省報告前に毎日記者とのインタビューに応じたこと

について文句をつけた。

角房はこのことで「外務官僚という奴は肚がない」と憤慨していた。この旅行は毎日の布施記者の紹介で始めて実現したものでありた。当然のことでもあった。

角房は、この旅行でその名を全国に轟かせ坂西中将の斡旋で、貴族院に招かれ「外蒙の情勢と其の将来」と題する講演を行なった。

貴族院には、旧大名の子孫など日本の超上流貴族から議員が選ばれ、徳川家達が議長をつとめており、奄美人としてここでの講演は、史上角房唯一人である。後に、この講演は、単行本となつた。

蒙命後、外蒙首都ウランバートルのことについて角房は「外蒙古にはロシヤの勢力が深く入り込んでいるのは想像以上である。人口は九万人、支那勢力は全く地におちソビイエト化されている。

日本人に対しても親密な暖かい感情を持っている。外蒙古には沢山の友人がおり、張作霖の廻し者と疑われ三回も取調べを受けたが釈放された。外蒙古人の好意によるものであった。予が到着すると「日本のラマ僧が来た」と市内で評判になり大歓迎を受けた。六年前住んでいた当時と比べて日本人に対する感情は全く変わることはなかった。

先生は、軍医も驚く程心臓が強く一命をとりとめたが、両手の前腕骨折をギブスで固定しているので指が動かぬようになり万事人手を要しわれわれは結構忙しかつた。ギブスを外しても両手指が動かぬので、温泉療養所へ隨行、先生と一所に入浴、お湯の中で先生の両手をもみあげた。この手が動かぬと養護兵の任務から解放されないので一生懸命にもんだ。先生は額に大汗をかき、額をしかめ痛が

聞えてくる。行き交う老若、男女、旧式もハイカラもこれに喜捨している。内蒙古独立軍動をしている国民党とロシヤ、外蒙古の関係など詳細な視察内容を伝えている。視察日程は七十五日に及ぶ困難な行程でもあった。

(2) 六ヶ月の重傷で入院

それは、昭和七年九月二十八日のことである。蘇炳文討伐に参加し、十二月になり興安嶺の積雪で前進が不可能となり帰還することになった。葛根廟（げげんすむ）附近で悪路のため乗っていたトラックが転覆し、積んであつた弾薬箱の下敷となり、人事不省の重態で鐵嶺の陸軍病院に収容された。

盛島機関の門下生となつた中嶋万歳（元蒙古連合自治政府総務科長）は、後年「徳王とともに」という手記の中で「盛島先生は、両手首骨折と胸部打撲で寝台にねたきりの人事不省。軍医から絶対安静を命ぜられ、大小便の始末からせねばならぬ。未時少佐の指令で私と他二人が松花ホテルに下宿して、八時間交代で看護兵勤務をすることになった。

先生は、軍医も驚く程心臓が強く一命をとりとめたが、両手の前腕骨折をギブスで固定しているので指が動かぬようになり万事人手を要しわれわれは結構忙しかつた。ギブスを外しても両手指が動かぬので、温泉療養所へ隨行、先生と一所に入浴、お湯の中で先生の両手をもみあげた。この手が動かぬと養護兵の任務から解放されないので一生懸命にもんだ。先生は額に大汗をかき、額をしかめ痛が

るのを若い力でほぐしていく。三月になり先生の右手は元通りとなり、彌銃を使えるようになった」

門下生の不眠の看護や強い心臓を親から授けられていたために、九死に一生を得たともいえる事件であった。

(3) 錫拉穆林で日本軍顧門団全滅事件

昭和十一年三月、盛島機関は百嶺廟に進出した。省主席の傳作儀^{ふさぎ}は、一行を政府の客廳に招待、國賓待遇の接待をした。内蒙では珍しい米飯やとておきの日本酒も出た。関東軍の尖兵である特務機關に大変気の使いようであった。傳作儀は、地方軍閥の一人だが抗日英雄として革命後は中華人民共和国の要職にもついた軍人である。

同年の八月、関東軍の板垣參謀副長が綏遠で傳作儀に会い、局地的防共協定を提案したが拒否された。そこで関東軍は、喧嘩をふつかけることになり、田中隆吉參謀が直接指揮をとった。軍隊は各軍閥からかき集めたものと、純蒙古人部隊四千人を編成、大漢義軍と称した鹿児島出身で赴任した許りの小浜氏善大佐が日系指導官となつた。

十一月三日、大漢義軍が動き出したら百靈廟は、伝作儀軍の急襲を受け、盛島機関は徳化に撤退した。十一月三十日から百靈廟の奪回作戦が開始された。角房は夜間は零下三〇度という極寒の中で、黒いラシャで襟は狐、裏は狼の毛皮の外套にロシヤ風の毛皮帽のいでたちで機関員の指揮に当っていた。

大漢義軍の中には、敵側の工作員が多数入っており、その動向は

全て敵に筒抜けで参謀長の揚は、敵の正規中央軍の参謀大佐でもあった。

十二月二日、百靈廟に迫った大漢義軍は一旦シラムレンに退いた。島機関長は、連絡のため外出していたので一命をとりとめた。

日本政府は、有田外相が「今次綏遠のことは、内蒙古軍との紛争で、帝国の干与するところではない。従つて内蒙古軍の行動に関しては政府はもとより、軍に於ても何等援助を与えていないことは勿論である」声明を出した。後日、殉死した全員に日本帝国政府は叙勲を行なつた。

殉難記念碑の碑文を書く

昭和十四年七月に、シラムレンで全滅した盛島機関の同志を含む二十九人の碑が蒙古高原シラムレン河畔の巖上に建立され、碑文を角房が書いた。東京高師で国語、漢文を専攻していただけに格調高い文である。

同志に贈つた言葉そのものが、角房の当時の意志を反映したものでもあった。「祖国を離れ内蒙荒漠の地に屍を暴す。敢て憾みながら」というのが毎日の行動を貫いていた生きて戦う哲学ともなつていた。

五〇年前に、蒙古高原に建立されたその碑がその後破壊され捨てられたのか、あるいは日本帝国主義侵略の遺物として保存されてい

するのか不明である。徳之島人として、誰かが先人の夢のあとを見聞する日を夢見たいものだ。

昭和十四年七月吉日

盛島角房 撰

『現代資料』(8) みすず書房 一九六四年七月刊から。

錫拉穆林殉難烈士碑文

慈ニ綏東事変殉難二十九烈士不滅ノ氣魄ヲ後世ニ伝ヘ其忠魂義烈ヲ千載ニ顯彰シテ以テ護國の英靈ヲ鎮ム

顧ルニ滿州事変ノ余焰漸ク熄ミテ隣境內蒙古民族ハ逐次勃興シ昭和十一年十月義軍ヲ起シ蔣介石政権ノ圧迫ヲ排除セントスルヤ傳作義ハ兵ヲ内蒙古に進メ聖地百靈廟ヲ蹂躪シ更ニ大挙シテ錫拉穆林廟ヲ襲撃スルニ至レリ是綏東事変ノ起リシ所以ニシテ内蒙古復興青史ノ一班ヲ物語ルモノナリ

此時ニ於テ諸士ハ内蒙古軍ト其行ヲ共ニシ本事變ニ参加シテ各地ニ転戦赫々タル勲功を顯シ十二月九日遂ニ此地ニ於テ殉難セリ

惟フニ國歩艱難ニ際シ諸士ハ奮然身ヲ挺シテ内蒙古ノ難ニ赴キ只管至誠奉公ノ志ヲ効シ蒙古復興ヲ完ウスルヲ以テ本懐トセリ其行動タルヤ真ニ皇國ノ士道精神ヲ海外ニ発揚セルモノト謂フヘク遠ク祖国ヲ離レ内蒙古荒漠ノ地ニ屍ヲ暴ス惻惻ノ情功ナルモノアルモ亦敢テ憾ミ無カラ

宜ナル哉諸士ノ英靈ハ畏クモ護國ノ神ト祀ラル剩ヘ叙勲ノ恩寵ニ浴シ今又日蒙官民有志ノ發意ニ依リ蒙古高原錫拉穆林河畔ノ巖上ニ碑ヲ建テ其由來疑未ト功業トヲ列記シ遺烈ヲ永ク百世ニ伝ヘ以テ追惜思慕ノ情ヲ留ム

盛島角房年表

一八八六年（明治十九年）

十月十五日、父角三、母おとかねの三男として徳之島亀津二九一七番地に生まれる。姉とめ（盛島忠良妻）長兄角一、次兄角安、妹房江（伊地知一郎妻）他妹二人。幼名ジユマ。

一八八七年（明治三〇年）十一歳

亀津小学校（當時四年制）卒業。竹内良友・徳三宝ら同級生。

一九〇八年（明治四一年）二十二歳

延岡中学校卒業。長兄角一を頼り上京。伊地知一郎方に同居。

一九〇九年（明治四二年）二十三歳

東京高等師範入学。国語・漢文専攻。講道館で四十一年八月一日に三段に昇格。三宝に負けじと猛練習に励む。

一九一〇年（明治四三年）二十四歳

延期中の徵兵検査を名瀬で受ける。痔病のため丙種となる。

一九一一年（明治四四年）二十五歳

台灣台中測候所長伊地知一郎を頼り、台灣に渡り、台中公学校の柔道教師となる。講道館四段の免許取得は本人の話。同年、保安

上危険との理由で友人らの中止を勧告を無視し、台湾単独一周旅行を断行。

一九一二年（明治四五年）二十六歳

北京に行き、坂西利八郎大佐（北京駐在武官）の門下生となる。坂西大佐は、後に中将となり貴族院議員になった大陸通軍人として有名。角房は、この人の門下生として生涯師事した。

一九一三年（大正二年）二十七歳

晋北のラマ寺に入り、蒙古で絶対的権力を持っているラマ僧の修行を行なった。同時に蒙古語、中国語の学習を三年間続けた。本籍地を龜津から鹿児島に移す。

一九一九年（大正八年）三十三歳

外蒙庫倫（後の蒙古人民共和国首都ウランバートル）に、杉井七夫大佐らと関東軍特務機関を開設し、ロシヤ並びに外蒙状勢を探る。

大正六年、庫倫に日本人居留民会が結成されたが日本人は三〇人で、そのうち、男はわずか十人であとは娼婦たちであった。

一九二〇年（大正九年）三十四歳

外蒙では、ソ連に支援された人民軍の独立運動が激しくなって来た。日本人居留民会は八人で銀一千元を支那軍司令部に献金し、人民軍弾圧に協力した。

駐庫武官江副浜二が二〇〇元で、角房も五〇元の献金をしたこと記録に残っている。十月に、人民軍が庫倫に進軍して來たので全日本人は引揚げた。角房らの機関も張蒙口に移つた。

一九二六年（大正十五年）四〇歳

大阪毎日新聞北京特派員布施辰治記者の紹介で、赤色蒙古への入国ビザを入手、日本人として始めて庫倫（ウランバードル）に入つた。八月十六日「大阪毎日新聞」夕刊は、角房の赤色蒙古探訪の談話を、スクレープ特報記事として大々的に報じ、角房の名は全国に轟き渡つた。

同年、坂西中将の紹介で貴族院議長徳川家達ら有志議員に外蒙の実情について講演を行なつた。

一九二七年（昭和二年）四十一歳

『外蒙を中心とした日露関係』を刊行。七月に、母の遺骨を抱いて帰国。衆議院補欠選挙に立候補中の久留義郷と奥山八郎の統一を進めたが成功せず、徳之島に渡り、奥山八郎の応援をした。

一九二九年（昭和四年）四十三歳

西蘇尼特で、内蒙古自治運動を展開していた王公の一人徳王と始めて会う。

一九三〇年（昭和五年）四十四歳

十一月から十二月にかけて、東亜考古学会探査隊（江上波夫・水野清一ら）を内蒙古に案内する。翌年調査團を徳王に紹介内蒙古各王公の調査協力を得た。

一九三二年（昭和七年）四十六歳

十二月、抗日反乱軍討伐に参加、帰路トラック事故で積荷の下敷きとなり、六ヶ月の重傷を負う。このため、手足は生涯不自由した。

一九三三年（昭和八年）四十七歳

八月、西ウジュムチン特務機関長となる。

関東軍の特務機関長は、佐官級軍人が殆んどで、民間人は角房が唯一人であり、関東軍にとって、いかに重宝な存在であったかがわかる。

一九三四年（昭和九年）四十八歳

貝子廟（アバカ）特攻機関長就任。関東軍田中久少佐を西蘇尼特で、徳王に紹介。徳王と関東軍の接渉の始まりをつくる。『外蒙古と自治内蒙の現状』を刊行。

一九三六年（昭和十一年）五〇歳

三月、百靈廟特務機関長就任。十一月地方軍閥抗日英雄傳作儀軍の急襲を受け、百靈廟を撤退。シラムレンで、百靈廟奪回作戦中の蒙古人部隊が反乱、日本軍指揮官小浜氏善大佐（鹿児島出身）ら日本人二十九人は殺害される。角房は、連絡のため、当地不在で命拾いをした。

一九三八年（昭和十三年）五十二歳

内蒙古徳王に隨行して帰国。徳王は、十月三十日天皇に拝謁勲一等旭日章を授与された。関東軍の中では、誰一人このようないくつか勲章を授与したものはいない時代であり、角房の功績として大々的に新聞は報じた。

角房は、奥山八郎宅に泊り、竹内良友なども再会、また、徳王の書を奥山八郎に贈った。徳王ら蒙古要人らと撮影した記念写真が残されている。

一九三九年（昭和十四年）五十三歳

七月、シラムレン河畔崖上に「二十九烈士殉難の碑」を有志らと

建立。碑文を角房が書いた。この碑には、反乱によって、昭和十一年十一月九日に殺害された、二十九人の日本軍顧問らの氏名と事件の経過と追悼文が刻されている。東京高等師範学校で、漢文を専攻しただけあって堂々たる碑文と関係者は話している。

一九四〇年（昭和十五年）五十四歳

四月二十九日、内蒙古工作の功により勲五等双光旭日章を受章する。

一九四一年（昭和十六年）五十五歳

痔病手術のため帰国。大阪で入院。兄角一の長男清一（当時京大生）らの見舞を受ける。

一九四二年（昭和十七年）五十六歳

養子房郎を徳之島に連れて行く。房郎は姉とめ（夫忠良）の子供（異説もある）であり、徳之島で育てるのが最高と判断したのだろう。

母校亀津小学校に駱駝のぬいぐるみを贈る。国宝的的人物といわれ、少年のあこがれの人でもあつた郷土の大先輩からの贈りものは、校長室に大切に保存されていたが、その後どうなつたか不明。

一九四四年（昭和十九年）五十八歳

三月、蒙古善隣調査所顧問に就任。八月二日、鹿児島県国分町の女きみえと再婚。養子房郎を徳之島から国分町に疎開させる。

一九四五年（昭和二十一年）五十九歳

蒙古連合自治政府参議就任。三十二年間内蒙古独立に尽力した功が報いられた。四月二十八日長女房枝生まれる。喜びも束の間、八

月十五日終戦となり、第二の故郷張家口を捨て日本へ引揚げる。米軍政下の徳之島へ帰らず妻の実家のある国分町に落ちつく。

一九四六年（昭和二十一年）六〇歳

大陸時代に患らった病気が悪化。七月二十六日、国立霧島病院で死去。墓は、国分市龍正寺にあり、きみえ夫人が守っている。

忠良

房郎（角房養子）

とめ

清一（神戸製鋼取締役）

角安

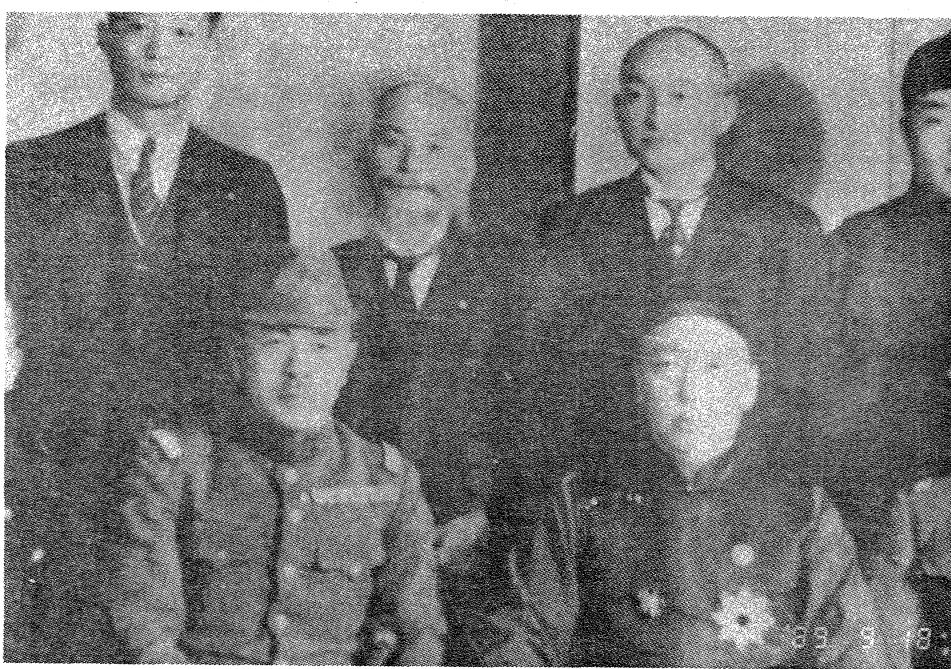
角一

亀津
三
九一七番地
角
おとかね

房江
房
枝
きみえ

伊地知一郎

女（？）
女（？）



後列左から二人目・盛島角房 前列右・蒙古の徳王
(1938年)

参考資料(1)高原千里（蒙古回顧録）昭和48年らくだ会本部発行

(2)内田勇四郎著盛島角房伝非売品昭和50年限定一〇〇部発行(3)徳王とともに、私と蒙古。中嶋万歳(4)現代史料八巻昭和39年みすず書房

刊(5)竹内良友「蒙古徳王顧門役盛島角房君の思い出」昭和54年徳之島郷土研究会報第七号。(6)証言。盛島清一、高岡善成、木原健次郎、

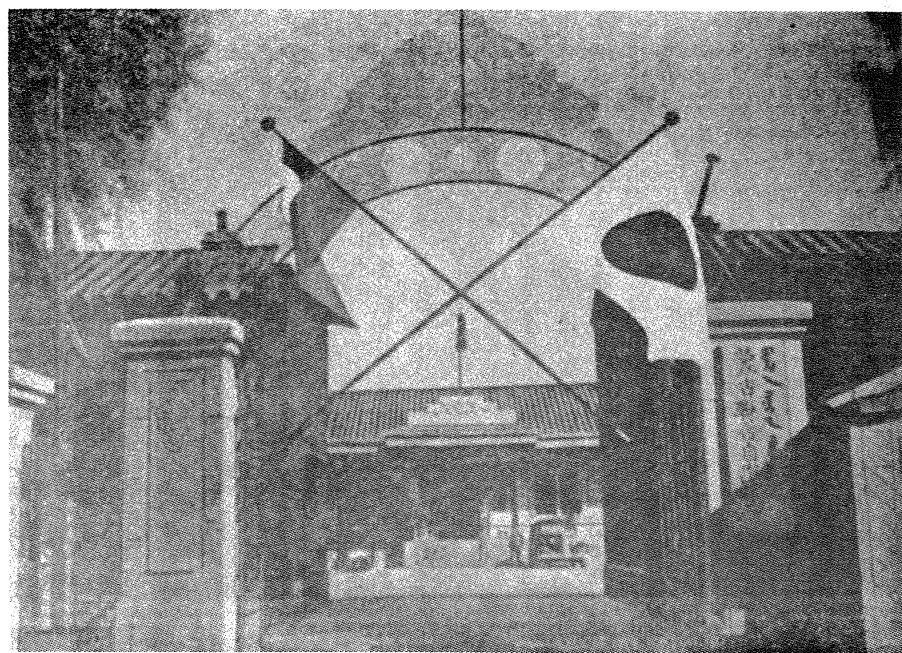
池江善雄、都竹武年雄。亀津小学校卒業名簿（昭和52年刊）



当時の邦字新聞



盛 島 角 房 (1940年)



蒙古連合政府正門(張家口)